

図書館システムの多言語対応

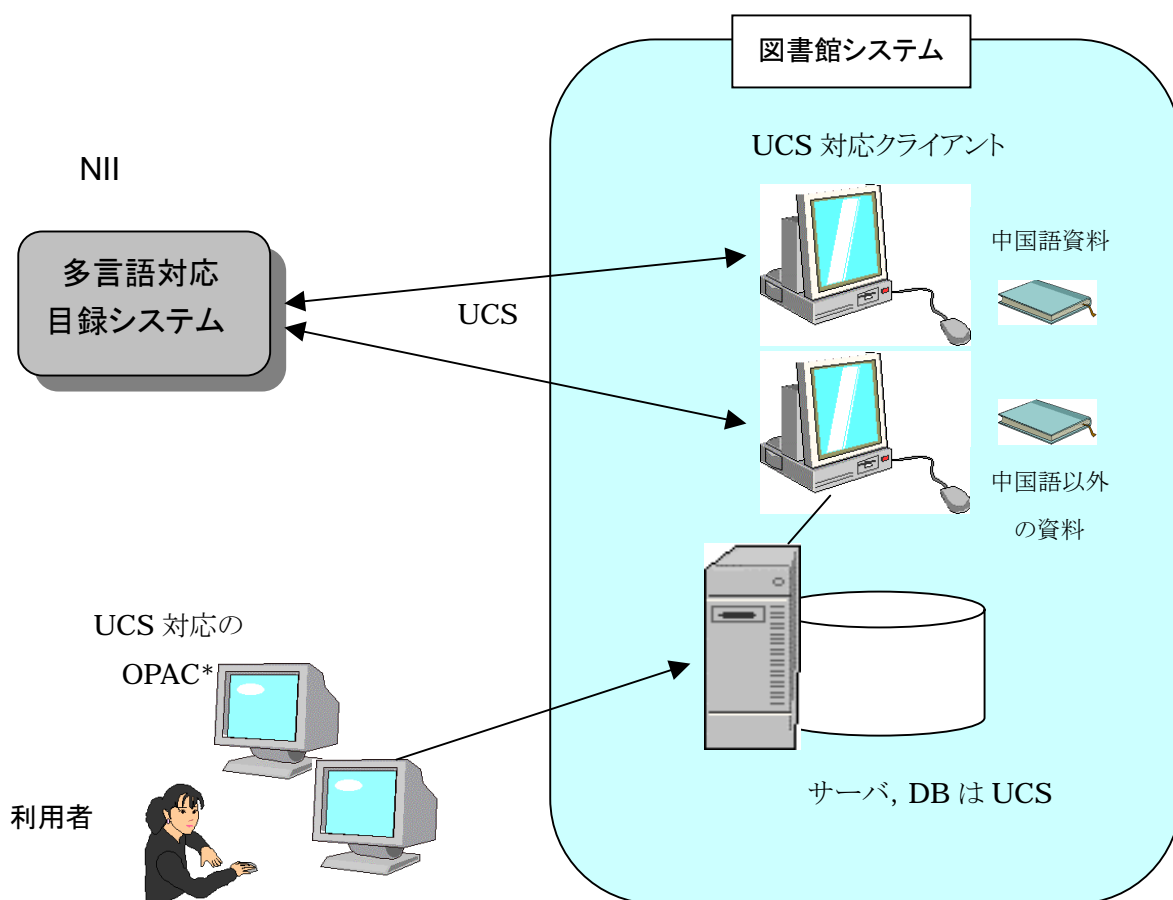
(1)完全対応モデル

図書館システム側を完全に多言語対応とするためには、図書館システム及び図書館データベースを全面的に UCS 対応にする必要があります。こうすれば、一つの端末で全ての言語資料の登録が可能となります。Windows をはじめとして、UCS 対応の計算機環境が普及しつつありますので、最終的にはこの形態になるものと予想します。

具体的には、次の部分について、今後、各図書館システムメーカーが UCS 対応の開発を行う必要があります。

- 1) データベース(UCS 対応の DBMS の採用及び UCS へのデータ移行)
- 2) 図書館システムサーバ
- 3) 新 CAT クライアント

図書館システム開発メーカーの対応状況を見ながら、システムリプレースの時期等にあわせて、多言語対応図書館システムの導入を検討してください。



*Web ブラウザで検索できる場合、Microsoft Internet Explorer(IE)4.0 以上であれば、Microsoft Global IME で中国語、ハンゲルの入力が可能

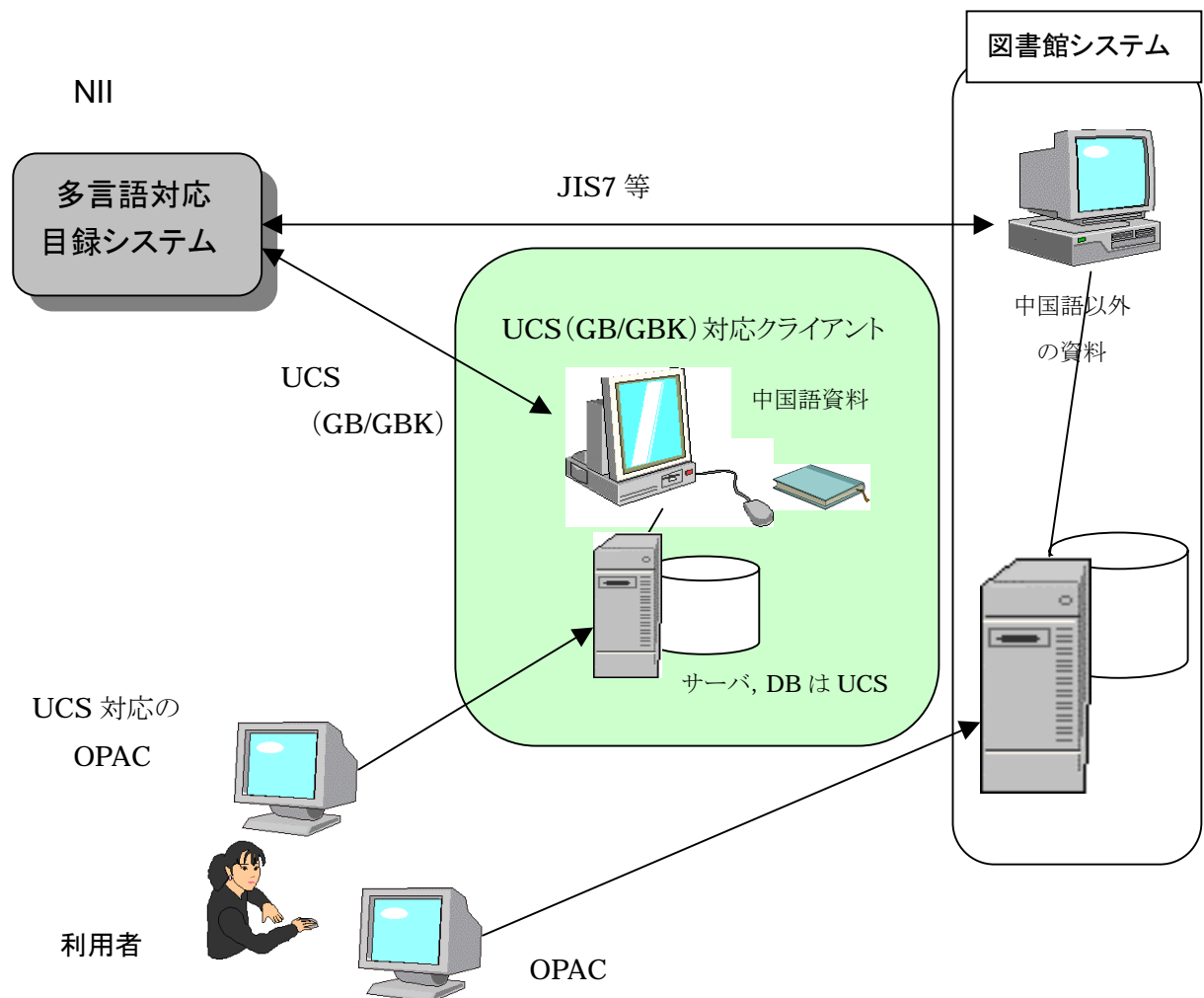
(2)部分対応モデル

図書館システム側が全面的に多言語対応できない場合、従来の図書館システムに加え、新たに多言語対応のシステムを部分的に導入する方法が考えられます。この場合、言語の種類によって多言語対応システムを利用することになります。

次のように、従来の資料を扱う図書館システムとは別に、多言語資料用として小規模の UCS 対応システム一式(サーバ、DB, クライアント)を用意する方法となります。*

*中国語処理専用として、GB あるいは GBK 対応システム一式という選択肢もある。

当面はこの方式で対応し、将来完全対応を行うといった、段階的な対応も考えられます。



(3) 暫定対応モデル

最後に、図書館側に多言語対応データを持たずに、総合目録データベースへの登録だけを進めるという方法があります。

この場合、図書館では UCS 対応クライアントを用意して*、NII 側にデータを蓄積するだけとなります。

*中国語処理専用として、GB あるいは GBK 対応クライアントを採用するという選択肢もある。

多言語資料については、図書館 OPAC でのデータベースの公開はできないので、多言語対応する Webcat を OPAC の代替とします。

そして、将来的に図書館システムが UCS に対応した時点で、総合目録データベースから個別版を入手して、図書館データベースへの取り込みを行うことになります。

